

武藏野日曜聖書講筵 降誕節

## 大歓喜

——ルカ伝第1章26～38節、2章8～35節——

1968年12月22日  
小池辰雄

一方的な恩寵 新しい次元の世界 汝の言のごとく我に成れかし 大歓喜を福音する どん底の生まれ方 救い主 御靈による新生 同時性・同質性 受けるか、受けないか 言い逆いを受くる徴

## 【ルカ1・26～38】

<sup>26</sup>その六月めに、御使ガブリエル、ナザレというガリラヤの町におる処女<sup>おとめ</sup>のもとに、神より遣<sup>つかわ</sup>さる。<sup>27</sup>この処女はダビデの家のヨセフ<sup>いいなすけ</sup>といふ人と許嫁<sup>いいなすけ</sup>せし者にて、其の名をマリヤと云う。<sup>28</sup>御使、処女の許<sup>もと</sup>にきたりて言う『めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕<sup>とも</sup>に在せり』<sup>29</sup>マリヤこの言<sup>ことば</sup>によりて、心いたく騒<sup>おぞ</sup>ぎ、斯<sup>かか</sup>る挨拶<sup>あいさつ</sup>は如何なる事ぞと思<sup>おも</sup>い廻<sup>めぐ</sup>らしたるに、<sup>30</sup>御使いう『マリヤよ、懼<sup>おぞ</sup>るな、汝は神の御前に恵<sup>めぐみ</sup>を得たり。<sup>31</sup>視<sup>めぐみ</sup>よ、なんじ孕<sup>みこも</sup>りて男子を生まん、其<sup>そ</sup>の名をイエスと名づくべし。<sup>32</sup>彼は大ならん、至高者<sup>ちかく</sup>の子と<sup>とな</sup>られる。また主たる神、これに其の父ダビデの座位<sup>とこしえ</sup>をあたえ給<sup>お</sup>え、<sup>33</sup>ヤコブの家を永遠に治めん。その國は終ることなかるべし』<sup>34</sup>マリヤ御使に言う『聖<sup>めい</sup>れ未だ人を知らぬに、如何にして此の事のあるべき』<sup>35</sup>御使こたえて言う『聖<sup>めい</sup>靈なんじに臨み、至高者の能力なんじを被わん。此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と<sup>ことば</sup>えらるべし。<sup>36</sup>視<sup>めぐみ</sup>よ、なんじの親族エリザベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女<sup>いはら</sup>といわれたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。<sup>37</sup>それ神の言には能わぬ所なし』<sup>38</sup>マリヤ言う『視<sup>めぐみ</sup>よ、われは主の婢女<sup>はしめ</sup>なり。汝の言のごとく、我に成れかし』ついに御使、はなれ去りぬ。

## 【ルカ2・8～35】

<sup>8</sup>この地に野宿して夜、群を守りおる牧者<sup>ひつじかい</sup>ありしが、<sup>9</sup>主の使その傍らに立ち、主の栄光その周囲を照したれば、甚<sup>いた</sup>く懼<sup>おそ</sup>る。<sup>10</sup>御使かれらに言う『懼<sup>よろこび</sup>るな、視<sup>よろこび</sup>よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歓喜の音信<sup>おとずれ</sup>を我なんじらに告ぐ、<sup>11</sup>今日ダビデの町にて汝らの為に救主<sup>すくいぬし</sup>うまれ給えり、これ主キリストなり。<sup>12</sup>なんじら布にて包まれ、馬槽に臥<sup>みどりご</sup>し見る嬰児<sup>しのし</sup>を見ん、是その徴<sup>しるし</sup>なり』<sup>13</sup>忽<sup>たちま</sup>ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讃美して言う、<sup>14</sup>『いと高き所に



は栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ』<sup>15</sup>御使等さりて天に往きしとき、牧者たがいに語る『いざ、ベツレヘムにいたり、主の示し給いし起れる事を見ん』<sup>16</sup>乃ち急ぎ往きて、マリヤとヨセフと、馬槽に臥したる嬰児<sup>17</sup>とに尋ねあう。既に見て、この子につき御使の語りしことを告げたれば、<sup>18</sup>聞く者はみな牧者の語りしことを怪しみたり。<sup>19</sup>而してマリヤは凡て此等のことを心に留めて思ひ回せり。<sup>20</sup>牧者は御使の語りしことく凡ての事を見聞せしによりて、神を崇め、かつ讃美しつつ帰れり。

<sup>21</sup>八日みちて幼児<sup>21</sup>に割礼を施すべき日となりたれば、未だ胎内に宿らぬ先に御使の名づけし如く、その名をイエスと名づけたり。

<sup>22</sup>モーセの律法に定めたる潔<sup>22</sup>の日満ちたれば、彼ら幼児<sup>23</sup>を携えて、エルサレムに上る。<sup>23</sup>これは主の律法に『すべての初子<sup>24</sup>に生るる男子は主につける聖なる者と称えらるべし』と録されたる如く、幼児を主に献げ、<sup>24</sup>また主の律法に『山鳩<sup>25</sup>一対あるいは家鵠<sup>26</sup>の雛二羽』と云いたるに遵いて、犠牲<sup>27</sup>を供えん為なり。<sup>25</sup>視よ、エルサレムにシメオン<sup>28</sup>という人あり。この人は義かつ敬虔にしてイスラエルの慰められんことを待ち望む。聖靈<sup>29</sup>その上に在す。<sup>26</sup>また聖靈に主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、<sup>27</sup>此のとき、御靈に感じて宮に入る。両親その子イエスを携え、この子のために律法の慣例に遵いて行わんとて來りたれば、<sup>28</sup>シメオン、イエスを取りいただき、神を讃めて言う、<sup>29</sup>『主よ、今こそ御言<sup>30</sup>に循<sup>31</sup>いて僕を安らかに逝かしめ給うなれ。<sup>30</sup>わが目は、はや主の救を見たり。<sup>31</sup>是もろもろの民の備え給いし者、<sup>32</sup>異邦人を照らす光、御民イスラエルの栄光なり』<sup>33</sup>かく幼児に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、<sup>34</sup>シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たん為に、また言い逆いを受くる徵のため置かる。<sup>35</sup>——剣<sup>36</sup>なんじの心をも刺し貫くべし——これは多くの人の心の念の顯れん為なり』

### ● 一方的な恩寵

今年の集会の恵みを今日この集会に結集して、本当に皆さんが新しく特別なクリスマス、降誕節を、一人ひとりが何らかの意味においてここに新しい一步前進を——前進するためには何かが来なければ前進できない——その前進の土台として、原動力としてこの降誕節を我々が迎えるという、気構えでこれに立ち向かっていただきたいと思います。とにかく、自分自身がごまかしのない世界に本当に入つていただきたい。私も入ります。そういうことで、ひとつ進んで参ります。



<sup>26</sup>その六月めに、御使ガブリエル、ナザレというガリラヤの町におる処女<sup>おとめ</sup>のものとに、神より遣さる。<sup>27</sup>この処女はダビデの家のヨセフという人と許嫁<sup>いななづけ</sup>せし者にて、其の名をマリヤと云う。<sup>28</sup>御使、処女の許にきたりて言う『めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕に在せり』

「恵まるる」というのは、全く上からの一方的な恩寵の事態です。すぐあとに、  
「主なんじと偕に在す」

「恵まるる」という言葉が続いています。そうしたらば、

「恵まるる者よ」

と言われたから、マリヤは喜んだかと思つたら、

「心いたく騒ぐ」

と書いてある。

<sup>29</sup>マリヤこの言によりて、心いたく騒ぎ、斯る挨拶は如何なる事ぞと思ひ廻らしたるに、<sup>30</sup>御使いう『マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に恵を得たり。<sup>31</sup>視よ、なんじ孕りて男子を生まん、其の名をイエスと名づくべし。<sup>32</sup>彼は大ならん、至高者の子と称えられん。また主たる神、これに其の父ダビデの座位をあたえ給えば、<sup>33</sup>ヤコブの家を永遠に治めん。その国は終ることなかるべし』

と。御使が現れる。もうそういう事態が私たちに簡単に想像のつかない事態です。

私は実は、昨日夢の中で、この朝の集会のある面を示されています。そういう、夢の中で示されたりすることが、時々私はある。

御使がはつきりと、

「マリヤよ、懼るな」

と。神の恵みは、普通考へているような次元ではないわけです。次元のちがうものがある。もし、次元の同じものなら、これは福音の世界ではない。始めからそのことが分かつていいものですから。マリヤもそうだつた。だから、恐がる。「心いたく騒ぎ」というでしょ。「懼れるな」と。

私はこの集会を開いてもう28年か。途中から少し白波を蹴立てて進みだしたらば、この通りに恐れて、この集会から出ていった人が幾人もある。始めのうちはちょっと居るかと思つたら、

「いやとてもこれは」

なんていうわけで出て行く。まことにこれは惜しい。どこの教会へ行つたつて、それはダメですよ、そういう出かたをしたのでは。どこかの教会へ行つて落ち着くでしようけれども、その落ち着きは本当の落ち着きではない。



### ●新しい次元の世界

福音の世界は、次元のちがつた世界に入れることなんです。新しい次元の世界に入るところが、それが福音の福音たることで、そうでなければ福音ではない。そうでなかつたら、それは何か聖人君子の教えくらいのものだ。だから、私は「キリスト教」なんていう「教」の字を使うのは嫌いなんです。どこまでもこれは福音です。

「懼れるな」

とは

「恐いことはないよ」

ということです、もうひとつ言えば。

「恐くはないよ。恐くない世界に入れてやるよ」

と。だから、福音に立ち向かう人は、頭からもうバカになつて信頼してからなければダメです。

「どうだろうか、こうだろうか」

と考えて、「これはちょっと自分には合わないから」なんてね。合わないに決まっているんです。合うものなんかは、私たちは合わない。

大体始めっから、

「ヤソ教は」

なんていうわけでね、私は小学校時代には敬遠して、私の兄は内村先生の集会へ行つたけれども、ひとつもそれに関心が起きない。

「宗教なんてものは」

なんていうわけでね。けれども、兄を見ていると、何かちがつていて。始めから合うなんて言つたら、これはおかしいんだ、本当は。誰だつて福音は始めから合わない。ところが、合うような福音を伝えているからね、

「あつ、これはいいな」

なんて。ちつともよくはない、本当は。

恐がるような福音が、これが本ものの福音です。どうぞ、皆さんは、そういうことで、新しく来た方に、

「ちつとも恐いことはない。実際に楽しい世界です。始めはちょっと次元がちがうから、おかしく思えるかもしれないが、そんなことではない。この世界でなかつたらもういられません、ということになりますよ」

ということを、どうぞ、新しい方に懇ろに言つてください。私一人ではダメだから。

「あそこの集会へ行くと、どうもなにかみんなつんとしていて」

なんて、そんなのは冗談じやない。喜びの世界です。だから、私は今日は「大歓喜」と題に書いた。一人ひとりが大歓喜の人で、



「あそこへ行つてみたら、何かしらんけれども、うれしくなつてしまつた」

なんてね。それならいいです。とかく、都会の人間というのは澄ましてしまうんだよな。どうぞ、田舎みたいになつてください。信州の小諸の集会はみんな本当にニコニコしていらっしゃる。あれはまた田舎のよさなんです。本来、そういう世界ですから。私の顔が少し恐いのだから何かしらんが、ちつとも恐くはない（笑）。

### ●汝の言のごとく我に成れかし

「マリヤよ、懼るな」

と。恐いことはないと。これは大変な恵みなんです。そこらにある恵みとはちがうんだ。いや本当にそうです。これは空前絶後の恵みですから。けれども、常識に合わないものだから、マリヤはやはりどうもよくわからない。

「知る」<sup>34</sup> という言葉は旧約聖書にもあるとおり、「アダム、エバを知る」という、ああいう言い方をする。

如何にして此の事のあるべき

子どもの生まれるはずはないんだと。はつきり、そういうことが書いてあるからおもしろい。

聖靈のことが語られて、一番先に「至高者の能力」ときたです。この聖靈は至高者の力を

持つていて。至高者の力を持つていてる聖靈。いいですか。至高者の力のない聖靈なんてものは聖靈ではない。まあ、私みたいなやつが何だかしらんけれども、力を得てしまつたのは、この聖靈が来てしまつてからです。それははつきりしている。いわゆる無教会時代とそのことはちがつてしまつた。これは次元がちがう。

そして、不思議な力がお前に臨んで、

此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称えらるべし。

「さあ、処女降誕というものがあるだろうか、どうだろうか」

と、昔からさかんにやつていて。そんなことは議論することはない。次元のちがつた、我々の知情意の判断を越えた世界のことが語られているのに、こつち側の次元で議論したつて何が始まるか。もう、私は聖書の前に降参するだけです。降参したら、その世界に入つたら、

「ああそうでしょう」

と楽に受けとれるようになる。どうぞ、皆さん、この大歓喜に入る前には降参しなくては。この世の悲しみとか喜びとか憂いとかいろいろありますが、どんなにこの世の喜びが素晴らしいても、福音における喜びとは質がちがう。現在のあなた方はいろんなことが気にかかるつていてるかもしれない。けれども、その気にかかつていてこと、悲しみや憂い、そんなものも問題にならない。



36 視よ、なんじの親族エリザベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女はらと  
いわれたる者なるに、今は孕みもりてはや六月になりぬ。<sup>37</sup>それ神の言には能わ  
ぬ所なし』

「能わぬ所なし」

という。言が意味だつたら能わないが、しかし、言は力であるから能わぬことがないんです。聖書の言は力を持っているから、能ぬことなし。キリストの言を受けとつてているのに力が来なかつたら、それはキリストの言を受けとつてているのではない。それはキリストの言の意味を受けとつてているだけだ。意味の話ではない。言の内実そのもの。そのものは必ず力を持つていて。だから、聖書を読んだら、もう楽しくてしようがない。力がくるから。万事これ力の世界です。物騒なことを言うけれども、暴力ではない。

<sup>38</sup>マリヤ言う『視よ、われは主の婢女はしためなり。汝の言のことく、我に成れかし』  
マリヤの38節のこの言葉、これは絶対にあなた方の胸にしつかり刻んでくださいよ。このマリヤの一言は聖書の中でも最も大事な信仰の言葉のひとつです。

「視よ、われは主の婢女はしためなり——男だつたら、視よ、われは主の僕なり——」。

汝の言のことく、我に成れかし』

これ以上の祈りはない。これは最高の最深の祈りです。

「汝の御言みことばの如く、御意みこころの如く、我に成れかし」

と言う。キリストは、

「汝の御意を成させ給え」

と言いました。あそこに、

「私を通して」

という言葉が隠されていると私は言いました。その言をマリヤが実は言つていた。

「汝の言の如く、どうぞ私に成つてください」

とマリヤがはつきり言つていて。さすがに、イエスのお母さんです。このマリヤの一言を瞑想して深く祈つたらば、あなた方はもう福音の世界の突破ができるんです。もうたまらんです、私はこういう言葉は。

「視よ、われは主の婢女はしためなり。汝の御言のことく、我に成れかし」

と。

「自分はとてもあなたの御言の如く成れません。けれども、どうぞ、あなたの御言が、力ある御言が私において成就してください。私を変質変貌させてください」と、自分を投げ出しているんです。



●自分を神の前にそのまま投げ出す

「我に成れかし」

と言つて、澄ましているのではない。澄ましたつて、成れはしないですよ。成れない者が成るんだから。成れない者が成るためには、自分が投げ出せられなければ成れない。はつきり、自分というものが、自分の性格、才能、それが何であろうとかんであろうと、そんなものは問題にしない。これを本当に投げ出す。

「私はあの人よりもこうだああだ」と、

と、そんな比較はなにも要らん。神さまとの関係には、比較研究は絶対に禁物。ただ自分が本当に神の前にそのまま投げ出すことだけ。そのことをはつきり言い切らなければ、これは福音にならない。

「私はまだ福音を聞いてから何か月だ」とか、

「福音を聞いてから何年だ」とか、

とか、そんなことも問題にならない。今日、今、即刻、この時、この場において。福音の世界はただそれだけです。そういう瞬間ににおいて、本当に永遠の質を持った瞬間を、自分が本当にそれに立ち向かつて、自分を投げ出すところ。そこが本当に一刀両断するような瞬間です。自分の歴史を両断するような瞬間です。そういうような受け方をしないで、何が福音か。いいですか。

このマリヤが、

「視よ、私はあなたの婢女はしためです」

と。「婢女」というのは、その主人の言うことに絶対に服従です。「僕」というのは、絶対に信頼している者です。イエスはヤーヴェーの僕、神の僕。パウロはキリストの僕として自覚していた。

今、一般に言われているところの民主主義だと自由だとかは、何を言つてゐるかと言いたくなる。まず、人間がこの場に立たないで。日本はこんなことをしていたら」とびますよ、藤井先生が言つたとおり。経済的にどんなに隆盛になつても、日本人の魂はサタンの虜になつてゐる。一部の学生なんかはとんでもない。しかし、一部の学生にかぎらない。小学校から大学に至るまで教育はもうダメです、こんな教育をしていたのでは。魂のことが本当に留守になつてゐる。私はD大学の授業でもそのことを叫びます。それで悪ければいつでも辞めるよと言つてます。私たちはもはや、御名のこの真理を隠してゐるわけにはいかん。ごまかすわけにはいかん。

「視よ、我是主の婢女である。どうぞ、あなたの御言の如く私に成就してください」と、挺身して自分を投げ出している。必ず成りますと。もう生れつきのどうのこうのと、そんなことではない。私たちは本当に、あなた方一人ひとりは本当に、今日このクリスマス



スを、このマリヤのこの一言を本当に受けとつて、これを自分のはらわたの告白として進まなければ、この降誕節を迎えたことにはならない。本当にお腹の底で

「然り、アーメン」

と言つてますか。

「視よ、我は主の婢女である。汝の言の如く、どうぞ、成つてください。あなたの御言が、どうぞ、私の中で成就してください。私は獻げています」

と。これは力が来ます。御靈の本当の力が来ます。そうしたら、もういい。皆さんももうその境地にかなり既に入つてていると思いますが。どうしても、そこは私は読まざるをえないので、このところをまず申したわけです。

### ●大歓喜を福音する

次に2章に行きます。天下の戸籍があつてどうのこうのなんて書いてあります。8節、

<sup>8</sup>この地に野宿して夜、群を守りおる牧者ありしが、

イスラエルの民は、詩篇23篇にあるように、神を牧者とし自分たちをその羊の群として自覚していた民です。その牧者がそこに居たというのは非常にふさわしい情況です。

### <sup>9</sup>主の使その傍らに立ち、

ここにも「主の使」とある。私たちのこの集会でも、あるクリスマスで本当に天使が靈的に現れた時があつた。ときたまそういうことをなさる。その時、皆さん後に天使が立つた。目には見えなくても、本当にその世界に入ると、降り立つてくるというわけです、神の御意ならば。

### 主の栄光その周囲を照したれば、甚く懼る。

何かしらんが、靈光が、靈的な光がそこを包んだ。それだものだから、

「おかしいな、夜にこんなに明るくなつてどうしたのだろう」

と。レンブラントの絵にもありますとおり。いたく懼れた。ここでも懼れてしまつた。恐がる。これは次元がちがうから。

幽靈が出てきても恐れるんだ。ちよつと次元のちがつたやつが現れる。けれども、こつちがその靈的次元に入つていれば、幽靈はちつとも恐くない。向うはむしろ困つているのだから。

「どうしましたか？」

と聞いてやる。

「そうですか、お氣の毒ですね。それでは祈りましょう」

なんて、幽靈と一緒に祈る。そうしたら、幽靈が喜んで姿が消えてしまう。聖靈にあれば、もう恐いものはなくなつてしまふわけです。

「シャーローム」「平安」



という言葉は、神の力を着せられるところの事態なので、ただ安らかという字ではない。神との関係が本当に立つて、そこに力ある事態があることを「平安」「シャーローム」という。<sup>10</sup>御使かれらに言う『懼るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歓喜の音信を我なんじらに告ぐ、

大歓喜の音信です。「大歓喜を福音する」というような言い方です。私は前に『曠野の愛』の26号に書いた「言い逆らいの徵」という文章は、あれは清瀬で集会をした歴史的なクリスマスです。

今日は、その「大なる歓喜の音信」の、その「大歓喜」と題したわけです。ルターはこの福音のことを

「歓喜の叫び」

と言いました。福音のことをさすがにルターは「歓喜の叫び」と言つた。さすがにルターですね。福音は歓喜の叫びである。詩篇の中にもよくこの「叫び」という言葉が出てきますが、今のクリスチヤンの祈りは本当に叫びの祈りなんていうのはあまり聞かない。

「体裁がわるい」

なんて。なにも体裁わるくない。あるときは、本当に叫ぶような祈りをしなければいられないはずなんです。また、静かな祈りであつても、その質は叫びでなければダメなんです。そういう歓喜の叫びが福音である。

「大なる歓喜の音信を我なんじらに告ぐ」

というのを、直訳すれば、

「私はなんじらに大歓喜を福音する」

ということです。

### ● どん底の生まれ方

<sup>11</sup> 今日ダビデの町にて汝らの為に救主うまれ給えり、これ主キリストなり。

<sup>12</sup> なんじら布にて包まれ、馬槽に臥しおる嬰児を見ん、是その徵なり』

「徵」「セイメイオン」という字はもともと「天來の示し」という言葉です。啓示的なものです。天來の示しがこの「徵」「セイメイオン」という。「馬槽に臥しおる嬰児」がなぜ徵か。何も徵でも何でもない。普通の赤ん坊だよね。およそ徵ならざるようなものに本当の徵が隠されているわけだ。誰も顧みないわけです。宿屋が一杯で部屋がないから、仕方がないから馬小屋に入つて、そして月が満ちたものだから、そこで馬槽の中に生まれたという、どん底の生まれ方をした。

世のどん底を担う人は生まれ方がどん底である。だから、この嬰児が徵ではない。馬槽に生まれたとてが本当はその徵なんです。馬槽の中に、人間らしくない生まれ方をしたような生まれ方。これはどん底の生まれ方をしたのが、これが本当の徵である。王宮



に生まれたのではない。靈界の王者は一番惨めな姿で生まれた。当時、アウグストウスというローマ世界帝国の皇帝がいた。そこに靈界の王者、「ザ・キング・オブ・ザ・キングズ」(王達の王)が最も惨めな隠れた生まれ方をした。けれども、これは靈界には實に明らかであるから、この不思議な現象が起きている。星に導かれて東から三人の博士たちが来たということもある。

<sup>13</sup> **忽ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讃美して言う、<sup>14</sup>『いと高き**

**所には栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ**

「人にあれ」と書いてありますが、

「人にやつて來た」

と私はむしろ完了的に訳したい。

「現にいと高き所には栄光が神に現れ、地には平和が主の悦び給う人に現れた」と。「いよいよそうであれよ」という響きは出でますけれども。現にもうその現象が現れているんだから、

「もう栄光が現れ、地には平和が主の悦び給う人にやつて來たのだから、さあさあ、

悦びなさい」

ということ。しかし、この悦びが実はわからないんです、どういう悦びなのか。言われてみても、何を悦ぶんだか。ちょうど今の普通のクリスマスは、何だかしらないけれどもちよつとうれしそうだなんて、そんなうれしさです。我々が今日迎えているところのこの悦びはそんな悦びではない。大歓喜と言つたのは、ただ度合いが大きいのではない。質がちがうんです、この大歓喜というのは。喜びの質がちがう。現実がどのような状態であろうとも、この質のちがつた喜びはいかなる状態にもやつてくる喜びです。そうでない地上の喜びは、その情況によつて、その喜びの大きさが大きかつたり小さかつたり中くらいだつたり。そうではない。こちらの状態如何にかかわらず、この大歓喜はそれに打ち勝つ。一切を担つてしまふような、包摶してしまふような、貫いてしまうような、そういう歓喜です。

## ● 救い主

旧約聖書のゼカリヤ書9章に、

「<sup>9</sup>シオンの女よ大に喜べ、エルサレムの女よ呼<sup>よば</sup>われ、視<sup>よ</sup>汝の王汝に来る。

彼は正義<sup>ただ</sup>しくして救を賜り柔和にして驢馬に乗る。即ち牝驢馬の子なる駒に乘るなり。<sup>10</sup>我エフライムより車を絶ちエルサレムより馬を絶ん。戦<sup>いくさ</sup>争弓も絶るべし。彼國々の民に平和を諭<sup>さと</sup>さん。その政治<sup>まつりごと</sup>は海より海に及び河より地の極<sup>はて</sup>におよぶべし。」(ゼカリヤ9:9～10)

このゼカリア書9章9節というのは、正に靈界の王者であるキリストの預言の言葉として不思議なところです。



「シオンの女よ、エルサレムの女よ」  
といふのは、

「シオンの市民よ、エルサレムの市民よ」

ということで、シオンもエルサレムも同じことです。既に旧約でそのように、「喜べ」と言って預言し、一切の戦争的なものはそこで止み、そして本当の平和を来らしめるところの義の王者であり、義のゆえに勝利である。しかもまた、柔軟なる人。柔軟というのは、神さまに対して従順ということです。そういう人が現れるという。ここにも「喜べ」ということがある。普通の喜びとはちがう喜びです。こういう人がやつてくるが、これは本当の喜びだ、消えることのない喜びだと言うわけです。

ゼパニヤ書3章に、

「<sup>14</sup>シオンの女よ歓喜の声を挙よ。イスラエルよ樂しみ呼ばわれ。エルサレムの女よ心かぎり喜び楽しめ。<sup>15</sup>エホバすでに汝の審きをやめ汝の敵を逐いはらいたまえり。イスラエルの王エホバ汝の中にいます。汝はかさねて災禍にあうことあらじ。<sup>16</sup>その日にはエルサレムに向かいて言うあらん、懼るるなかれシオンよ汝の手をしなえ垂るるなかれと。<sup>17</sup>なんじの神エホバなんじの中にいます彼は拯救を施す勇士なり、彼なんじのために喜び樂しみ愛の余りに黙し、汝のために喜びて呼わりたもう。」（ゼパニヤ3・14～17）

ここも非常に著しいところです。この二カ所は特にクリスマスの預言にふさわしいところでして受けとられるところです。これは歓喜、讃美です。喜び歌えと。歓喜は同時に讃美となりますから。ここにも「懼れるな」と書いてある。なにも恐いことはない。

それから、イザヤ書35章10節、

「<sup>10</sup>エホバに贖いすぐわれし者うたうたいつ帰りてシオンにきたり、その首にとこしへの歓喜をいただき楽しみとよろこびとをえん。而して悲哀となげきとは逃さるべし。」（イザヤ35・10）

なぜ喜ぶかというと、このイザヤ書にはつきり書いてある。「贖われたる者」と書いてある。救い主が現れて、なぜ、私たちが喜ばなくてはいかんのか。それは「救い主」と言うからには、本当の救いがくるからです。いかなる人も、どんな人間も人ひとりのことを救うことができない。救い主、贖い主が現れた。

### ●御靈による新生

救いとは即ち、罪からの贖いをすることである。罪から贖い、そして今度は、永遠の生命を与えてくれるもの。もうひとつ別な言葉でいうと、御靈を注いで新生をさせるもの。「十字架と聖靈」の事態です。これが我々の、なぜ喜ばないではいられないか、なぜ次元のちがう喜びであるかは、ここではつきりするわけです。即ち、罪の贖い。これは誰もできない。



キリストでなければ。罪なき者、神の御意を、

「主よ、汝の御意をどうぞ我に成させ給え」

と、完全にそれを成してしまった。あのマリヤの祈りをその子イエスは完全に自分で成就してしまった。マリヤは一時はよかつたけれども、やはりマリヤはマリヤだからダメだよな。けれども、キリストはその母の祈りを自分の祈りとして、これは本ものが本当にやつてしまつた。これが神の子。即ち、贖いをする力を持つている。キリストだけが贖いの力を持つている。その義その愛は贖いの力を持つている。また、その実存そのものが贖いの大業を遂げれば、必然、永遠の生命体として顯れざるをえない。靈体をもつて顯れざるをえない。それが復活体というものです。復活というのは、ただ息を吹き返したのではない。

その永遠の生命を、その質的存在的の中に本来持つていたところの永遠の生命をもつて遂に貫いた。この靈生の勝利を、この靈生を實質的に与えてくれるものが御靈です。私たちは復活節を迎えるが、降誕節を迎えるが、十字架の金曜日を迎えるが、ペントコステを迎えるが、帰するところはみな同じです。これなくして、私たちがなぜ大歓喜であるか。馬槽のキリストは、大歓喜が約束されているところの事態なんだ。まだ大歓喜そのものは、その事態においては成就していないけれども、これは大歓喜を約束しているところの徵だから。私たちの中にキリストがもう御靈の事態として現れた。

その私たちの中にこのキリストの御靈を本当に受けとつて、

「もういいです、自分はどうでも。もう何も考えません」

と。過去がどうであろうと、現在がどうであろうと、未来がどうなろうと、いいです。もうそんな相対的な時間的なものは乗り越えてしまう。実はもう永遠の中に、この相対的な時間次元にいながら——人生は地上ではせいぜい百年くらいだ。とにかく、人生の相対的時間の長短にかかわらず——もう私たちは永遠の中にある。永遠というのは時間の長さを言つてはいるのではない。これは時の質です。滅びざる時を持つている。

瞬間に永遠の質を持つている。それはどこからくるかというと、聖靈を受けるまでは、この永遠がわからない。聖靈がくるまでは、この永遠というものがどういうものだかわからない。ただ想像して無限に長い時かと思う。そんなものは想像したつてどうにもならん。御靈というものは滅びないんだから。滅びない靈なんだ。滅びない靈がくれば、もう永遠の質がすぐわかるわけです。

だから、死んでも死にませんよと。まず聖靈というものはなんとまあ素晴らしいものであるか。これはとても説明なんかできない。どんなに説明しても。聖靈のことを本当にもの凄い一巻の書を書いたつていいくらいです。ところが、未だかつて世界の神学者に一人もいない。それだけ聖靈に対しても打ち込んで論じてはいるようなものは。私は神学の新しい本が出ているのをちょっととのぞいて見るんだ。大体、聖靈のことは書いてあるか書いてないかだね。あつても、ちよこつとつけたりですよね、みんな。それくらい神学者がダメな



んだ。だから、パウロやペテロやヨハネが嘆くよ、

「一体何の神学か。そんな神学はよせよせ」

と。パウロなんかは、神学なんて言わなくたって、もう重厚なものを持っている。学ではなくて、その事態そのものを。

このキリストの降誕において、キリストが我々の中に、同じ次元の中に降りてきた。どん底の担いの徵、その馬槽の生まれ方をもつて降りてきた。このキリストはイエスという身体に受肉した。これは靈の結晶体です。御靈の結晶体。もう12歳のキリストには、他の坊さんや学者どもはかなわない。聖靈の角度からものを言つてゐるから。だから、キリストが受肉して現れたら、このキリストを私たちが私たちの存在の中に受肉させなければ。この御靈のキリストが受肉してこなかつたら、また御言が受肉してこなかつたら、この降誕節を迎えたことにならない。今、実にそのことを私たちは端的に受けとりつつあるわけです。

### ●同時性・同質性

今、旧約の預言でもあつたとおりに、「喜べ、喜べ」という。そして、ことにイザヤ書においてこの「贖われたる者」である。贖いを約束され、實に私たちはもう降誕から十字架・復活まで、既にもうこれは成就されてゐる事態だから。降誕を祝うと同時に、十字架・復活・昇天・聖靈降臨まで全部ひつくるめたイエスというものをこの嬰兒みどりごにおいて見なかつたらば、何もならない。嬰兒において、

「梅檀せんだんは双葉ふたばより芳かんばしい」

というが、この嬰兒において既にそのことがはつきり受けとられてゐる。小さな子どもを見ても、目や耳や鼻や、お母さんやお父さんに似てゐる。ちゃんと将来の形までそこに出でてしまつてゐる。いわんや、イエス・キリストにおいてその成されるべきことはちゃんと約束されたものを私たちはそこを見るから、直ちにこの贖われたる恩寵を、全イエスが完了したところのその恩寵を受けとる。靈のキリストが受肉したその事態を私たちが喜ぶことは、同時に私たちの中にその御靈のキリストが受肉されることを喜ぶことでなければならぬ。

復活の喜びもまたそうです。復活のキリストを受けとることが同時に、私たちがキリストにあつて甦ることの喜びをそこに体験しなければならない。聖靈降臨を祝うこともみんな同じです。全部、同時性である。また同質性である。即ち、同時的、二千年前も今も同じである。また、同じ質のものが現象してゐる。福音は、そういつた次元の福音を私たちが同質的に受けとらないでどうしようかと。もしそうでなかつたら、つまんないですよ、正直。いいですね。皆さんは、

「今日この時に、確かにもう自分というものを考えなくなりました。そんなことはもうどうでもいいです。問題は、このキリストが、どうぞ、私に成つてください」



と。キリストの本願は、成ろうとしているのだから。

「お前の中に入つていい。お前は私の中に入れ。そうしたら、必ずそう成るぞ」と。  
「はい」

と、もうそのほかに答えようがない。「でも」なんて言うわけいかない。この「はい」ということでもつて、何かしらんが、あいかわらずダメな自分なんかをもはや、いくら引っかかつたつて、引っかかるかかっていながら引っかかるかかないという事態ですよ。いいですか、わかりますか。

「それでも私は」

なんて、なぜ言うんですか。私はダメに決まつているんだから。ダメなものをいつまで見ているんですか。私だって、何年たつても、自分を見たら、「それでも私は」というものが残るんだよ。

「それをすっかり無くしてしまつて、悟りすまそう」

なんて、冗談言うなと。そんなカスはどうでもいいんです。中に本当にちがつたものが、永遠的なものが、突破していくものがある。

「ああ、うれしいな」

と。それを本当に内観していく。

「ないかん」には二つ言葉がある。内観、内側に観る。内側にその聖靈の救いの事態を観る。新しき我を観る。また、内側に本当にそれを感得している。内感する。内側に感ずる。観かつ感じていかなくてはダメです。そして、それが体現されていく、必ず。必ず体現されていく。どんなに惨めでありましても、必ず体現される。

片一方はどんなに立派そうに見えて、それはダメなんだ、人間的なものは。どんなに立派そうなクリスチヤンだって、それはダメだ。神さまの目からみると、それはメッキなんだ。片一方はまことに慘憺たる姿をしているが、

「いや、あれは本ものだ」

と。神さまに、どうぞ、本ものだといつて喜ばれる人になる。人には、

「どうもダメな野郎だ」

と思われたつて。そういうたらドラマチックな、内側に本当に立つているもので勝つていく。躓いても転んでも倒れても、前進あるのみ。それで、あなた方は、

「何かしらんけれども、このクリスマスに、確かにこれはちがつた。もうつまらない思案はやめた。本当に変わりました。キリストの言が私の中で、言という、靈というキリストの事態が、受肉の事態が、私の靈がキリストの靈を受けて本当の受肉の事態が、展開を始めましたよ」

と言つてくれなくては。本当に無条件です。無条件の事態は、十字架が既に開いているんだから。わかりましたね。それは必ず力を持っている。思われている世界ではないから。



考えられている世界ではない。悟られている世界ではない。福音は必ず力を持っている。

「何かしらんが、うれしくなつてしまつた」

と。そこに初めてこの歓喜がくる。この大歓喜は力を持っているのだから。キリストの力がないような歓喜なんてものは、それは単に浮いた感情にすぎない。どんなにとぼけたような顔をしていても、その奥に本当の大歓喜のじっくり坐つた、そういう人になつてくださいよ。それはなりますから。聖靈がくれば必ずそう成る。

「ああ、本当にうれしくなつてしまつた」

と。そうしたら、喜怒哀樂を現さないのが東洋の美德であるなんて、そんなことを考えなくて、大いに笑つて喜んで結構です。 stoïcique 「ア・パ・テ・イ・ヤ」なんて——パトスを否定しているのを「ア・パ・テ・イ・ヤ」という——そんな必要はない。どうぞ、子どもらしく喜びを大いに表わして、

「あの人を見ていると、何だかうれしくなつてしまふな」

というような人になつてください。特に女の方が、そういう質の微笑みをなくなしたら、女の人はダメだよな。

### ●受けるか、受けないか

シメオンというのは、イスラエルの約束のことを祈つて待つていた人です。

<sup>25</sup> 視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔にしてイスラエルの慰められんことを待ち望む。

この「慰め」という言葉は「慰めよ、慰めよ」という、イザヤ書40章や49章によく出てくる。聖靈その上に在す。<sup>26</sup> また聖靈に主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、

「今日はもう、喜びの世界に入らなくては私はここを去るわけにはいきません」と、皆さんはそういうつもりで今、臨んでいましょうね。

<sup>27</sup> 此のとき、御靈に感じて宮に入る。両親その子イエスを携え、この子のために律法の慣例に<sup>したが</sup>いて行わんとて來りたれば、<sup>28</sup> シメオン、イエスを取りいだき、神を讃<sup>ほ</sup>めて言う、<sup>29</sup>『主よ、今こそ御言に循<sup>したが</sup>いて僕を安らかに逝かしめ給うなれ。』

シメオンは、

「もう私は見るものを見てしまつた。迎えるものを迎えてしまつた。もうわが望みは満たされたり。いつ逝つてもいいですよ」と。そういうシメオンです。

<sup>30</sup> わが目は、はや主の救を見たり。<sup>31</sup> 是もろもろの民の備え給いし者、<sup>32</sup> 異邦人を照らす光、御民イスラエルの栄光なり』



「光、光」という言葉が出てくる。何度も考へても、この聖靈の、神の福音の、キリストの世界は、あのダマスコ途上で現れたキリストも、もの凄い光をもつて現れた。変貌の山でもそうです。普段は何も光のないような顔をしているけれども、実は時あつてかもの凄く輝く。だから、マリヤもまだ、いいかと思うとまたちょっと、あんまり次元のちがつたものが現れているものだから、マリヤもまだちょっと戸惑つているところがあるんだ。

<sup>33</sup> **かく幼児に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、多くの人の或は倒れ、或は起たん為に、また言い逆いを受くる徵のために置かる。**

キリストは、傍観を許さない人である。キリストは、これに對して傍観的に三人称的に、

「キリストはどういう人でしょうか」

なんて研究したつてどうにもならん。イエスという人は研究の対象ではない。

「受けるか、受けないか」

というそういう相手なんです。だから、

「どうもあれば、福音の世界は困つたな」と言つて逃げていくのは倒れてしまう。

「いや、実にこれは本当だ」

と言つて、その前にまず倒れる人は立たされる。「俺は」と言つて立つているやつは本当は逆に倒される。ところが、

「これは参りました」

と、剣道でも茶道でもそうだよね。本当の達人の前に立つと、参つてしまつ。果たし合ひをしようと思つたが、どうもケタがちがう。「おみそれしました、参りました」と。剣道の名人が茶道の達人の前に頭を下げた有名な話がある。何の道でありましても、その道に本当に達すれば共通なものがある。

それは量的にではない。質的にです。どこまでも私たちは質的にです。楽しくてしようがない。聖靈を受けとると、どなたでも、どんなに中途でありましても、質的には達するところまで達しうるんです。現象的にはまだまだ未熟であつても、質的にはちゃんとその達すべきところが約束されているものがあらわれている。そういう生き方をしなかつたら、人生はつまらんですよ。一人も例外なしに神品です。そういう意味において我々自身が神品にならなくては。

### ●言い逆いを受くる徵

<sup>34</sup> **シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たん為に、**



そういうわけで、

「立つか、倒れるか」

ということ。私たちは本当に神の前に平伏す。私は形容詞で言っているのではないですよ、「平伏す」ということは。たとえ立っていても、魂は平伏しなければいかんわけです。ただ姿だけ平伏したって、

「そのうちに起き上がる」

なんてのはダメですよ。本当に神の前に倒れ平伏しているものは立たされる。「俺は」と言って立つているやつはみんな倒される。

また言い逆いを受くる徴のために置かる。<sup>35</sup>——剣なんじの心をも刺し貫く  
べし——これは多くの人の心の念の顕れん為なり』

「言い逆いを受くる徴」というのはイザヤ書8章に出てる。イザヤ書8章9節から15節のところを読むと、そういう事態が書いてある。キリストは、言い逆らわれる。

福音と文化は相反する。だから普通、

「福音はまあよしておこう。文化の方がいい。恰好がいい」

なんてね。恰好のいいものばっかりを今は世の中の人は求める。福音は恰好がわるいですから。ところが、この恰好のわるい福音を、次元のちがつたこの福音を、

「ちょっとこれは恐いな。あまりどうも感心しないな、あんな祈り方は」

なんてね。そんな現象でもつて本体の世界を忘れているような判断の仕方をやつて。しかし、これを本当に受けとらなければ、文化なんてものは生きてこないんです。そういつた逆説的な関係の中に本当のものが、本当の有機体的な関係があることをしらない。エラスムスは文化を積極的に肯定した。ルターは文化を否定し、福音を肯定してかかつたから、あれから近代文化の基礎を築いた。近代文化の展開はルターの福音によつて始まつたわけだ。この事実が証明しているではないですか。

人の媒介を通さなければ本当のものにならない。自分が本当にぶつ倒れて、いや実にキリストの十字架でぶつ倒される。自分でぶつ倒れるなん思つたらダメですよ。碎けなんて言つたつて、自分で碎けたつもりだつたらダメです。いくら碎けたつもりだつて、本当の碎けには来ないのだから。キリストの碎けだけが私たちに本当の碎けを与えて。それから碎かれていくんだから。

この福音の「言い逆らいの徴」。全く、生れつきの我々には何かちょっと味がわるいんだよ、この福音というのは。まあ、私は初めて聖書を読んだときに、

「これはとんでもない本だな」

と思つた。すつと来ないんだよね。ところが、今はもうすーすー来てしまつて困る。それはその世界に入つてしまふと、今度は、老子を読もうが、イスラム教のものを読もうが、ウパニシヤットを読もうが、何を読もうが、これが読めてくるから不思議なんだ。これは



聖靈が来なかつたら、福音なんて言つたつてそれは読めませんよ。

「あれは十字架がないじゃないか」

と、すぐそういう妙な判断をする。そんなことではない。こういう貫きと包摂を持つたものはもう説明できないです。この「言い逆らいの徵」が実は、一切を完全に成就するところの、円現させるところの徵であつた。もう皆さん、確信を持つてくださいよ、本当に。

今の若いご連中が私の言うことをバカになつて聞かないものだからね。自分の判断で聞いているものだから、なかなか入つてこない。もういい加減でD大学には愛想をつかしてしまう。どうして、バカにならぬのだろうね。私は本当に簡単ですから、もう内村先生には「はい」と言つて一時間目から感激して聞いていた。そうしたら、とにかくぐんぐん進むものね。そして今度は逆にみんな包摂するような世界に入つてしまう。事実、私が証明していますから、こんなやつが。

どうぞ、皆さん、ばかされたと思って、ばかになつてくださいよ。そうしたらば、大愚は大賢に通じてしまつたことがわかるから。大愚は大賢に通じていた。いい加減な小賢とはちがつた。本当の賢というものは、悟りというものはここにあつた。仏教の悟り以上の悟りがこの福音の中にあつたということですよ。

これでもう正直、世界の歴史を二つに割つてしまつたから。そして、

「天国か、地獄か」

ということをはつきり、自分自身をもつて挺身して示しているものが、これがナザレのイエス・キリストである。このイエス・キリストを受ける者は本当に天界に入る。これを拒む者は地獄へ行くよりか仕方がない。

「救いはこの他に来てないぞ」

と、ペテロがはつきり、使徒行伝でも言つてゐるところ。パウロも叫んでゐるところ。これは世界の果にいたるまで、どんなに人類が墮落しようが、必ず福音は勝つ。神の国は勝つてきます。それだけの本当の平伏しの魂がこの権威をもつてものが言えるんです。

かくキリストに平伏させられ、キリストに立たしめたる者。かくして、キリストを本当に内に宿したるもの。このクリスマスは、降誕は、いざこに降誕したか。ベツレヘムの馬槽に。いや然り實に、あなた方一人ひとりがこの馬槽となつてキリストを迎えたところに、必ず、私たちは本当に無我とされ、また本当にキリストと——キリストフォロスというものはキリストを担いだ男だよな、そのようにしてキリストに担がれ、キリストを担ぐという——本当にキリストと内的関係になつて、私たち自身が即ちキリストの徵そのものとなつて進んで行きます。

